

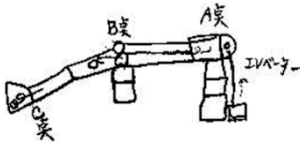
1 主体性を支える援助と環境の工夫

問題を乗り越える援助～コースを作り直そう～ 5歳児 学校法人大和学園 豊田大和幼稚園

ビー玉転がしのコース作りに年間を通して継続して取り組んできた子どもたちは、友達同士アイデアを出し合い遊びに必要な場所・材料・素材・用具など身近な環境を活かし新たなコースを創り出してきた。また、保育者は子どもたちの発想を活かした環境作りと援助を心がけて進めてきた。

(関連事例P.9)

アイデアの実現～困難を支える援助



コースが崩れそうになると誰かがすぐテープで直す。そんな中、S児がA点の所に、何かしようとしている。保育者が「Sくん、何考えてるの?」と聞くと「ここをビー玉が登っていくには、どうしたらいいのかな」と言う。保育者は、「ビー玉をてっぺんまで運ばばいいんだね」とS児に言った。

S児「うん…そっか!エレベーターにすればいいじゃん」と叫んで、持っていた箱をスウーと上げた。それを見ていたH児「ぼく、考えた。ヒモがいる」とS児にいう。「そうだね、でもどのくらいヒモを切ったら上がるか、それが問題だ」と言いながらS児はすぐに教材籠の所から麻紐を持ってきて、箱にヒモをテープで張り付け、高さに合わせて切った。

エレベーターをA点の所にどう付けるか考えた。ヒモをテープで張り付け手でたくし上げた。しかし、自分の思っているイメージに合わなかったのか取り外す。

ハサミで上の箱に切り込みを入れて、ヒモを挟んで引っ張ることを考えた。何回となく試し、やっとこのエレベーターに満足して次の箱を取りに行った。

保育者は、すぐに壊れる原因が、接着の弱さにあると気づき、ガムテープをもう少し強力な物へ変えることにした。そして、どうしてもうまく固定できない所では、保育者も援助した。



<考察> ○すぐに壊れる原因が接着の弱さにあると気づき、ガムテープを少し強力な物へ変えた。どうしてもうまく固定できない所では援助し、しっかりと安定させることができた。こうした保育者の援助は子どもたちの意欲を持続させ、子どものアイデアの実現化を図り、「科学する心」をみんなに繋げていく役割を果たすと思われる。

○エレベーターのアイデアはその後、他の組にも波及し、ビー玉転がしの道作りが長くなっていくことに貢献した。

新たなコース作り～アイデアを生み出す援助～



くま組にトレインコースロープという木製のおもちゃがある。担任が家からビー玉の道作りのヒントに使えるかもしれないと思って持ってきた。

それをヒントに昨日くま組が衝立にて、トイレットペーパーの芯を貼って、ビー玉転がしの道を作り、スロープにして遊んでいた。それを見て「転がる所が見えたら面白いね」と話していたS児、A児、H児、R児、K児、M児、Y児たちが「ビー玉が見えるようにするにはどうしたらいいか?」と言う。S児が「プチプチとかゼリーのカップとかUFOで使った容器物のやつかな」と考えていた。それを聞いた保育者が「この中で沢山あって、今使えるのはUFOで使ったファイルかな」と言うと「いいじゃん!それを丸めたら筒になるから」とR児が叫んだ。

ファイルをハサミで切って一枚に開き、丸めてテープで貼り、筒ができた。その筒を衝立にて貼りつけ、繋げた。繋げていくと折り返しになり、どうしようかと考えていると、B児が「穴を開けて落とすといいかも」と提案。そこでS児が穴を開けて落としたり上手く落ちた。しかし勢いよすぎて道からはずれた。それをS児は隅を塞いで落ちないようにした。上手く転がり「見えた、見えた」と何度も転がっていた。遊んでいるうちに「止まるどころ」「落ちちゃうところ」ということが見えて分かった。少しずつ修正しながらよく転がるようになり喜んでいった。

<考察> 子どもたちの中で今までのような道作りに、やや飽きてきた時期に、担任がビー玉の道作りのヒントに使えるかもしれないと思って設定した物が、このスロープ作りに新たに関心をもって積極的に取り組むきっかけになった。また、翌日になってトイレットペーパーのトンネルを転がっているビー玉を想像しているうちに、中が見たいという思いにかられたようだ。何かに使えると用意していたアクアファイルをうまく利用できたコースになった。

長期に亘る活動の中で、様々な問題に出会う子どもたちは、それらを乗り越えるために、身近な環境を自分たちのものとして活かしています。また、子ども同士の情報が伝わり合い、材料や場を工夫して使い、発想を活かして新たにコースを創り出しています。そのために保育者は、子どもの興味・関心や発想や技能などの実態を把握し、細やかな配慮をして環境を整えて工夫しています。